大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金　報告書
Outcome report

計画名 Plan	ブラジルにおける新たなアフリカ宗教
氏名 Name	松島　健悟
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	人間・環境学研究科　人間・環境学専攻　修士課程 2 年
渡航国 Country	ブラジル連邦共和国　サンパウロ州
渡航日程 Travel schedule	2024　年　11 月　1　日　～　2025　年　1　月　25　日

・ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
・写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
・各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
・日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

渡航計画の概要 Outline of the travel plan

今回のブラジルへの渡航は、修士論文の執筆に向けた情報収集、人脈形成、および文献収集を目的として実施された。修士論文では、大サンパウロ都市圏に拠点を置くアフリカ宗教、カルト・ジ・イェザン *Culto de Yezam* を対象に、ブラジルにおいて、アフリカ宗教およびその実践者たちが、彼らを取り巻く社会的環境、アフリカ宗教をめぐる言説や偏見、宗教間の複雑な関係性、さらには、時に矛盾や競合を生じる彼ら自身の価値観などと折衝しながら、宗教実践を組織し、特定の宗教的リアリティを創造する様子を人類学的に考察する。これにより、先行研究がしばしば陥りがちな、宗教実践を「伝統」の表現や「抵抗」の実践へと還元する視点を回避するとともに、近年の研究に見られる、実践者によって生きられる現実をわれわれ（≒西洋）のそれとは根本的に異なるものと措定するアプローチも退け、新たな視座の可能性を模索する。カルト・ジ・イェザンは、アフリカ系キューバ人の指導者が、アンゴラでの調査とイニシエーションの末に「復活」させたアフリカ宗教で、約 4500 年前にアフリカ大陸で成立した儀礼体系を基盤に持つと主張する。成立当初は、キューバで活動していたものの、2019 年以降はブラジルに拠点を移している。明らかになっている情報によれば、この宗教は、ブラジルにおけるその他のアフリカ宗教（＝アフロ・ブラジル宗教）とは、異なるコスモロジーおよび儀礼を持っているが、それらを体系的に記述した著作は、現時点で存在しない。そこで、修士論文のもう一つの目的は、カルト・ジ・イェザンのコスモロジーや儀礼を可能な限り忠実に記述し、ブラジルにおけるアフリカ宗教の新たな形態として、この宗教を提示することである。本渡航では、上記を念頭に、カルト・ジ・イェザンの活動拠点を訪れ、指導者や実践者たちの話を聞き、儀礼に参加することを計画した。

成果 Outcome

今回の滞在では、カルト・ジ・イェザンの指導者および団体内で高い地位を持つ複数の祭司から話を聞くことができた。また、アデジャ *Addejá* と呼ばれる儀礼や関連するアフリカ宗教の儀礼に参加する機会を得て、これまで不透明だったカルト・ジ・イェザンの活動内容を、部分的にではあるが、知ることができた。以下、カルト・ジ・イェザンの成立背景、組織構造、コスモロジー、儀礼をまとめる。

　はじめに、カルト・ジ・イェザンの成立経緯を整理する。今回、指導者が筆者に語った内容

は、先ほど述べたものおよび公式サイトの記述と概ね一致していた。しかしながら、彼はさらに、カルト・ジ・イェザンの再活性化と普及が、アンゴラでイニシエーションを受けた際に託宣によって授かった使命だったとして、それが現在の活動につながっていると述べた。また、彼は、各地のディアスポラにおいて様々な形態のアフリカ宗教が存在する現状を肯定的に捉えつつも、ルーツであるアフリカの実践が失われてしまう、あるいは失われていることを危惧し、それらの回復がカルト・ジ・イェザンの目的の一つであると語った。ブラジル、とりわけサンパウロを選んだ理由としては、カンドンブレ *Candomblé* やウンバンダ *Umbanda* に代表される多種多様なアフロ・ブラジル宗教の存在を挙げていた。ブラジルでの活動初期を知る実践者の一人は、2016 年に、彼女が同行者とともに当時キューバにいた指導者を訪ねたと語り、反対に彼女らが彼をブラジルに招いたこともあると述べる。こうした彼女らの働きかけが、彼の選択に影響を与えた可能性も考えられる。

次に、カルト・ジ・イェザンの組織構造を概観する。現時点でのブラジル国内の実践者数を正確に把握することはできなかったものの、イニシエーションを既に終えた者は、少なくとも 20 人以上存在し、アフリカ宗教ではあるが、アフリカにルーツを持つ人々のみで構成されているわけではない。カルト・ジ・イェザンは、一般的なアフロ・ブラジル宗教と同様、指導者を頂点とする階層構造を持つ。イニシエーションを受けた人々は、男性であればオログボ *Ologbo*、女性であればドッバーナ *Dobbana* と呼称され、彼らはアラ・ウォウォ *Ala Wowwo*、すなわち指導者のもとで学んでいくこととなる。さらに、オログボのなかには、イニシエーションの段階に応じたオログボ・カン *Ologbo Kam と呼ばれる役職*やさらに高位の役職、フェラーン *Fherám* が存在し、一部の儀礼にはフェラーンのみが参加を許される。ドッバーナにも同様の階層があるようで、アラ・ウォウォの配偶者であるドッバーナ・フラー*Dobbana Fhurá* は、組織内で高い地位にいることが窺えた。また、筆者が儀礼場を訪れた際、祭司がドッバーナ・フラーを「母」と形容し、彼女もまた祭司の一人を「息子」と呼んでいるのを聞いた。このことは、カルト・ジ・イェザンの組織構造が、家族的性格を備えている可能性を示唆している。

カルト・ジ・イェザンのコスモロジーは、オリシャ崇拝と関係している。オリシャ *orixá* は、西アフリカのヨルバ由来の神々で、それぞれが特定の自然環境や人間活動を司る。アフロ・ブラジル宗教の多くは、このオリシャを崇拝する宗教であり、特にヨルバ系カンドンブレでは、すべての人が生まれながらに特定のオリシャと結びついているとされ、それがその人物の性格や才能を左右すると考えられている。カンドンブレにおけるオリシャは、儀礼の場でトランス状態の実践者に憑依し、神秘的な力を振りまく存在である。ウンバンダにおいては、直接的な介入をしない閑職神として扱われるが、依然として崇拝の対象となっている。一方で、オリシャの一部は、歴史上の存在としても理解されており、かつて実在した人物が死後に神格化されたものとして捉えられている。カルト・ジ・イェザンのコスモロジーは、彼らが歴史的存在であることを強調し、自らの儀礼体系が、オリシャ崇拝の成立以前から存在したとして、生前のオリシャたちが崇拝していた神々こそが、その崇拝対象であると主張する。さらに、カルト・ジ・イェザンでは、カンドンブレの実践者たちが特定のオリシャと結びついているのと同様に、人間だったオリシャたちも、特定の神格と結びついていたと考えられている。指導者によれば、この神格 *Divindades* は、「生きている神々 *Deuses Viventes*」とも呼ばれ、これまで肉体的存在であったことはなく、死を迎えたこともないといい、このような特徴が、カルト・ジ・イェザンを「宗教的」というよりは「形而上学的」なものにしているという。こうした前提ゆえに、

指導者や実践者たちは、カルト・ジ・イェザンを、アフロ・ブラジル宗教と共存および両立が可能で、後者を強化するものとして捉えている。実際、カルト・ジ・イェザンの実践者の一部は、カンドンブレやウンバンダの祭司でもあり、なかには儀礼場の指導者を務める者もいる。

上記を踏まえ、以下、カルト・ジ・イェザンの儀礼に関する事柄を素描する。カルト・ジ・イェザンの儀礼は通常、指導者の住居を兼ねた儀礼場で行われるようである。外観は、庭がついた二階建ての大型一軒家といった様相を呈しており、実践者の隔離や限られた者だけが参加できる手順などは屋内で執り行われるようだが、儀礼の最終局面にあたるセレモニーは屋外のスペースで行われていた。屋内にはほとんど立ち入ることができなかったが、唯一入ることが許されたスペースは、応接間といった造りで、儀礼の装飾や道具が準備されていた。他方、屋外のスペースには、後述する神格の座や先祖を祀る木のほか、儀礼や託宣に用いられるであろう道具が数多く置かれ、最奥には団体のロゴがあしらわれた旗がかかっていた。ブラジルのアフリカ宗教において、儀礼場が指導者やその家族の住居を兼ねているケースは珍しくなく、本滞在中に訪問した儀礼場は、大きさに違いはあるが、どれもこの形態をとっていた。一方で、多くのアフロ・ブラジル宗教が、内輪のみの儀礼だけでなく、定期的な公開儀礼を実施しているのに対し、カルト・ジ・イェザンは後者を行っておらず、イニシエーションを重視するクローズドな宗教であるという印象を受けた。アラ・ウォウォは、この特徴を「フリーメイソン」に例え、儀礼に参加するのは、基本的に実践者たちとその家族のみだと説明していた。今回の渡航中に、筆者が参加できた儀礼は、アデジャ *Addejá* と呼ばれるものだけだったが、イニシエーション、ヘゾ・ゴラン *Rezo Goram*、ソルゲン *Sorguem* といった儀礼についても、指導者や祭司からある程度話を聞くことができた。

イニシエーションは、正式にカルト・ジ・イェザンに加わる人物が経験する通過儀礼であり、崇拝対象である神格とのつながりを形成し、神格の座 *assentamento* を授かることを目的とする。神格の座は、それぞれの神格を象徴する色をした壺状の容器で、中身は不明だが、神格の力が宿るとされる。イニシエーション希望者は、託宣で適性の有無や結びついた神格を確認した後、座の準備と隔離の段階に進む。実践者の話では、隔離期間は 2 日間とのことだが、土曜日に隔離を開始した場合、日曜日に終わるとも述べていた。隔離期間が明けると、新たな加入者は、指導者たちの歌に伴われる形で、屋外のスペースへと移動し、その後はセレモニーが催され、参加者全員で食事を共にする。

ヘゾ・ゴランは、前述のフェラーンと呼ばれる高位の祭司のみが参加できる儀礼である。この儀礼は、2 年に一度行われ、託宣を通じて、神格から今後 2 年間に関する予言を受け取ることができる。筆者の滞在中に、2025 年から 2027 年にかけてのヘゾ・ゴランが行われていたが、上記の理由から参加することは叶わなかった。ヘゾ・ゴランによって得られた予言の内容は、公式ウェブサイトにて公開されており、アフリカ宗教に関係する事柄から、自然環境、世界情勢など多岐にわたる問題に言及している。

ソルゲンは、「血の浄化 *Limpeza de Sangue*」を行う儀礼であり、儀礼場を清め、動物供犠の必要性を除去する目的で実施される。動物供犠をほとんど行わないウンバンダと異なり、カンドンブレでは、動物の血は人間がオリシャと関係を構築するうえで、必要不可欠であると考えられている。一方で、祭司たちのなかには、必要性を認めつつも、動物を殺すことに少なからぬ抵抗を覚える人々が存在する。ソルゲンは、そうした動物供犠を好まないカンドンブレの指導者の儀礼場から、動物供犠を取り除くことを目的としており、オリシャ崇拝成立以前から

存在するアフリカ大陸最古の儀礼体系であるという主張が、これを可能にしている。特殊な祈祷が用いられることを除き、具体的な手順は不明だが、この儀礼を行うにあたっては、事前に託宣を通じて儀礼場のオリシャの意思を確認する必要があり、オリシャが同意している場合にのみ実行可能であるという。また、ソルゲンの終了後に、その儀礼場の指導者は、カルト・ジ・イェザンのイニシエーションを受け、神格の座を授かる手筈になっている。現在、カルト・ジ・イェザンには、ソルゲンを経て、動物供犠のないカンドンブレを実践する者が一人おり、筆者が訪れた際、彼の儀礼場では、血を一切用いないイニシエーションが行われていた。アラ・ウォウォによれば、ソルゲンは、あくまで新たな選択肢の一つであり、アフロ・ブラジル宗教における動物供犠の存在そのものを批判しているわけではないという。

最後に、アデジャは、「聖人の授与 *Entrega de Santo*」、すなわちオリシャの座の授与を意味し、神格ではなく、オリシャと直接的に関わる儀礼である。アラ・ウォウォによると、アデジャは、ブラジルではあまり知られていないが、アフリカ各地やキューバでは盛んに行われており、カンドンブレのイニシエーションを指す「聖人の作成 *Feitura de Santo*」とは異なる、オリシャとの関係構築手段である。両者は、ともにオリシャと関係を築き、その座を授かる儀礼であるが、前者がカンドンブレの儀礼体系や儀礼場と密接に結びついているのに対し、後者では、授かった座を自宅に安置することができ、カンドンブレに属さずともオリシャとの関係を構築、維持することが可能となる。例えば、ある実践者は、オリシャとの関係が断たれるのが怖く、カンドンブレを辞める決断をできないでいたが、アラ・ウォウォからアデジャの存在を聞いたことで、所属していた儀礼場を辞め、今は自宅に置かれた座によって自身のオリシャとつながっていると語った。アデジャの過程は、イニシエーションとほぼ同様に進行する。はじめに、アラ・ウォウォの託宣によって、アデジャの適性の有無およびどのオリシャの座が授与されるかが判断される。前述のカンドンブレを辞めた祭司のケースでは、アデジャによって授かるオリシャと、彼女と結びつくオリシャが一致していたが、そうでないこともあり得るといい、その場合、託宣が誤った結果を提示したのではなく、その人物が抱えている問題に対処するために必要なオリシャを提示したと解釈される。託宣を終えると、座の準備と隔離の段階に移るが、アデジャの隔離も、イニシエーションと同じく、通常土曜日から日曜日の昼にかけて行われる。隔離期間が終わると、アデジャを受けた人物が、授かるオリシャを象徴する色の服を着て、顔に模様を描かれた状態で屋内から登場し、セレモニーが開始される。セレモニー自体は複雑なものではなく、アラ・ウォウォとドッバーナ・フラーが歌を歌い、隔離を終えた人物が、花びらを撒いて祝福する参加者一人一人に、手に持った袋から果物や野菜を手渡し、渡し終えると再び屋内に戻っていく。その後は、記念撮影のほか、アラ・ウォウォからアデジャについての説明がなされ、最後に食事をし、解散となる。

以上が、今回把握できたカルト・ジ・イェザンで行われている儀礼である。イニシエーションやアデジャにおける隔離や座を作成する点では、カンドンブレの儀礼と類似しているが、後者はオリシャによる憑依が伴う一方で、前者は憑依を伴わず、すべての手続きが託宣によって行われる。また、実践者のなかに遠方や国外に住んでいる者がおり、全員が顔を合わせる機会が少ない点、神格の座を各人が管理している点も特徴的である。

今後の展望 Prospects for the future

今回の滞在では、実践者たちに話を聞き、儀礼に参加したことで、カルト・ジ・イェザンのコスロモジーや儀礼について詳しく知れたのが、大きな収穫だった。また、カルト・ジ・イェザンとカンドンブレの両方で祭司を務める人々から、動物供犠の廃止にいたるまでの過程や心境を聞くことができたのも幸運だった。一方で、もともと動物供犠を行っていないウンバンダの

祭司たちが、カルト・ジ・イェザンに加入する背景には、別の要因があると推測されるため、今回は会うことができなかったが、彼らにも何かしらの方法で連絡を取る必要があると感じた。また、筆者の語学力が制約となって、深い内容に入れない場面が度々あったため、語学力を第一の課題として向上に努めたい。今後は、本渡航で見聞きした内容を精査し、自身の問題関心と照らし合わせたい。